

しちせいけん

七星劍（「丁未旅行記」抜粋 寛文七年（1667年）池田綱政著）

阿倍野の松原を通るに、小町が墳とて幽かすかなる竹篁たかむらの中に在り。程なく万代の池を見て天王寺の裏の門より入りぬ。

本堂とは太子の十六歳の木像なり。

七堂伽藍残りなく見て、蓮池の傍らなる六坊の中明浄院と云ふ法師の寺に入り、暫時涼みぬ。

此主僧は過にし年爰ここに詣で侍りける折、此處彼處案内せし法師なり。寶藏へ具して寶物見ぬものもあれば見せたき由を談れば、實に年久ければ慰めにも見よとて、案内して伴い行く。

様々あれば書付て後のなぐさめにもと、傍らにて疊たたう紙矢立取出して書付侍りぬ。

へいもうかいりん

へいししゅうりんけん

一、丙毛塊林の太刀（Ⅱ丙子椒林劍）

二尺二寸。鋤の上に此文字。古文字金ざうがんにてあり。守屋が首打たるよし。

しちよう

一、七曜の太刀

はばき

二尺五寸。鋤より切先まで星雲。鋤本に裏表に上下龍金

ぞうがん

象嵌にてあり。太子の太刀なり。

はばき

注、「鋤」は、柄や鞘などと同じ刀装具のひとつで、

刀身と鍔つばが接する部分にはめ込まれた筒状の金具。

令和七年五月十四日 大中臣正比呂 転記